

■ 活動記録 ■

◆ 研究活動 ◆

2015年度先端社会研究所共同研究プロジェクト

指定プロジェクトの進捗状況報告

先端社会研究所では、2012年度から4年間にわたり、三つの相補的プロジェクトとして、「南アジア／インド班」、「中国国境域／雲南班」、「日本班」を定め、「アジアにおける公共社会論の構想－「排除」と「包摂」の二元論を超える社会調査－」を主題に共同研究を進めてきた。

プロジェクト最終年度となる今年度は、共同プロジェクトの最終成果出版に向けて、全体研究会「文化的多様性を尊重する社会の構築に向けて」を2016年2月10日に開催した。当日は、各フィールドからの研究報告として、「南アジア／インド班」からは鳥羽美鈴が「旧宗主国の言語で書くということ」、「中国国境域／雲南班」からは西村正男が「永遠の聶耳」、そして「日本班」からは難波功士が「在日コリアン表象の変遷」と題する報告をそれぞれ行った。また総合ディスカッションとして、ディスカッサントの平山健二郎（経済学部教授）、山田真裕（法学部教授）、大石太郎（国際学部准教授）を交えて、各プロジェクトを横断した意見交換や議論の展開がなされた。

今後は、各プロジェクトをそれぞれ中心とした、三巻から成る関西学院大学先端社会研究所叢書『排除と包摂を超えて』の出版に向けて、最終成果を取りまとめる作業を進めていく予定である。以下では、各プロジェクトの進捗状況報告を掲載する。なお、報告は2016年2月時点のものである。

◆ 「南アジア／インド班」プロジェクト

代表：関根 康正（関西学院大学社会学部教授）

プロジェクト全体の最終年度に当たる今年度は、各班員の継続的な調査活動を実施するとともに、これまでに蓄積されたデータのとりまとめと分析・議論を行い、最終成果報告に向けた理論的基盤の構築を目指した。

前期には外部講師を招聘し定期研究会を開催した。本研究会では、歴史社会学的見地から南アジア系移民の共同性の在り方についての示唆を得て、南アジア系移民をめぐる排除と包摂の複雑な様態について、地域的にも時間軸においても視点を広げて考察することができた。また、現地調査としては、班員によるインドでのフィールドワークをおこなった。現地での参与観察を通して、排除と包摂の二元論を超える、運動論的次元での新たな分析視角を発見し、班員のあいだで実感的に共有できたことが本フィールドワークでの大きな成果といえる。後期におこなった班内共同研究会では、これまでの各班員の調査データをふまえ、最終成果出版のための各メンバーの論文執筆および班としての成果とりまとめに向けた話し合いをおこなった。

なお、本プロジェクトの最終成果の一端は、班員の鳥羽美鈴が2月10日の全体研究会の中で「旧宗主国の言語で書くということ」と題して発表を行った。

○2015年度「南アジア／インド班」主催研究会（通算第8回）

「British Subject at Bay：『駒形丸事件』とイギリス帝国下の南アジア系移民」

講師：栢木 清吾 氏（神戸大学国際文化学研究所研究員）

日時：2015年6月24日（水）16:00～18:00

場所：先端社会研究所セミナールーム

司会：鈴木慎一郎

栢木氏の報告では、1914年に発生し、「駒形丸事件」として国際的な注目を集めた一連の出来事を対象として、イギリス国立文書館で収集した植民地文書や、当時の新聞記事、裁判記録などの史料を丹念に検証することで、イギリス帝国下の南アジア系移民をめぐる法的・政治的状況の歴史の変遷が詳述された。とくに、帝国内の移民管理の導入にあたっては、「国民」「国境」という概念が場当たりの採用され、管理される側（移民）の抵抗を常に伴いながら、「近代」的の制度が次第に整備されていくという、移民管理の「歴史性」や「偶発性」への注目が喚起された。参加者を交えた議論では、カナダのアジア人排斥運動をめぐる当時の日印間の関係性や、日本語史料の有用性、同事件の歴史的記憶を考察することの今日的意義などが活発に討論された。

○班員によるフィールドワーク

調査地：インド デリー、ナーグプル

調査滞在期間：2015年10月19日～2015年10月25日

関根 康正、鳥羽 美鈴、福内 千絵

1) デリー新・旧両市街区の書店およびストリートのフィールドワーク

デリーの書店における多言語による書籍の配架状況を、新旧市街の都市環境や交通アクセスに規定される消費者層との関連から調査することで、インド系移民英語作家の作品受容の実状について知見を得ることができた。

2) ナーグプルにおける仏教改宗式の調査

ナーグプルにおいて、佐々井秀嶺師が導師を勤める第59回アンベードカル博士改宗記念祭（Dhamma Chakra Pravartan Vardhapan Din）、並びに世界仏教会議の現状を調査した。同記念祭に参集する彼らの行動と活動を目の当たりにして、佐々井師がアンベードカルの実践を引き継いで、それを大きく展開させたことを、参与的に理解することができた（ナーグプルには延べ100万人超の群衆が参集）。そこには、排除と包摂の二元論を超えて展開する、運動論的次元での〈共当事者性〉の生成の可能性が認められた。

本調査を通して、佐々井師の主導する被差別解放運動としての改宗運動の規模の大きさとその被

差別民の内外への重大な波及効果を実感的に捉えることができた。

なお、同記念祭に参加し、「日本からみた、インド『不可触民』の被差別状況と仏教実践」と題して、関根と福内が共同でヒンディー語の招待スピーチを行ったことで、聴衆との間に被差別問題の下からのスーパナショナルな主体形成の必要性を共有できた。

○関連成果発表

班員による調査研究成果の主なものは以下のとおりである。

関根 康正

講演『「国際化／グローバル化」の波動と文化人類学：複数性の岐路に立って』（ラウンドテーブルの趣旨説明）、日本文化人類学会第49回研究大会（2015年5月30日、於・大阪国際交流センター）

関根 康正

発表「B. R. アンベードカルと佐々井秀嶺師の不可触民解放運動にみる論理と倫理」、アンベードカル博士銅像建立奉賛『佐々井秀嶺高野山講演会』第2部「アンベードカル博士と現代インドの仏教徒」（2015年6月14日、於・高野山大学黎明館）

関根 康正

講演「川喜田二郎の人類学的知の開放と社会改革の実践：パーティ学、KJ法、移動大学、海外協力の哲学」日本文化人類学会課題研究懇談会「応答の人類学」（第24回研究会）（2015年9月15日、於・京都大学稲盛財団記念館）

関根 康正

講演「文化人類学の想像力」（基調講演）日本文化人類学会・研究成果公开发表シンポジウム「人類学的想像力の効用」（2015年11月8日、於・金沢市しいのき迎賓館）

関根 康正

「ある危機からの構築に向けて：『21世紀の日本文化人類学会の国際化とグローバル化』に関する問題提起」『文化人類学』79巻-4号、pp.469-479.

関根 康正

「〈「国際化／グローバル化」の波動と文化人類学：複数性の岐路に立って〉
趣旨説明：日本の人類学への制度的要請の背景と問題の所在」（資料と通信）『文化人類学』80巻-2号、pp.264-270.

福内 千絵

発表『「伝統」へのまなざし－植民地期インドのカタログ資料から』
民族芸術学会第139回研究例会（2015年11月14日、於・国立民族学博物館）

福内 千絵

発表「‘Puranic’ and ‘Vedic’: On the Response to the Work of Ravi Varma in Bengal」
国際ベンガル学会第4回大会（2015年12月12日、於・東京外国語大学）

◆「中国国境域／雲南班」プロジェクト

代表：荻野 昌弘（関西学院大学社会学部教授）

「中国国境域／雲南班」は、欧米型国家のなかで生みだされた社会科学的知の埒外に存在する「社会」のあり方について、中国雲南省新平イ族タイ族自治県の少数民族に関する調査を通じて明らかにすることを目指している。昨年度からは、班員である林梅（社会学部准教授）を代表に、各班員および佐藤哲彦先端社会研究所副所長が研究分担者をつとめる科学研究費助成事業研究プロジェクト「中国雲南省の少数民族における文化変容に関する社会学的研究」（基盤研究（C））が採択され、それとも連動しながら研究活動に従事してきた。今年度の具体的な研究活動は、夏に雲南省で実施した現地調査や研究会、学会発表や論文執筆を通じた研究成果の公表、定期研究会の開催に分けることができる。

○現地調査

2015年7月31日から8月8日にかけて、中国雲南省新平イ族タイ族自治県を中心に現地調査を実施した。先端社会研究所からは、荻野・林・佐藤のほか、班員である西村正男（社会学部教授）、村島健司（先端社会研究所専任研究員）が参加した。

現地では調査地に入る前に、昆明市において、研究協力機関である雲南省社会科学院の李永祥氏が率いる研究チームと合同で研究会を実施した。この中で、2016年度に日本で出版予定の成果報告書に向けての構想、および章構成やそれぞれの担当について議論が行われた。また李永祥氏からは、荻野との共編著として中国で出版を予定している、新平県の観光開発と少数民族の文化変容に関する書籍についての説明があり、「中国国境域／雲南班」の各メンバーも、それぞれ関連論文を寄稿することが決まった。

調査地の新平県では、荻野が約20年前に調査を行った竹園村（イ族）を再訪し、過去の調査データを基礎に、国家の介入や市場経済の浸透が見られる今日の村社会の変容について、追跡調査を実施した。さらに、観光開発（タイ族）やダム開発（ハニ族）などに伴う、人びとの移動の実態を把握し、政府が中心となって推し進める大規模開発が、歴史的に形成されてきた各民族の文化や民族間の関係性に対して、どのような影響を与えているのか。また、各民族は大規模開発のなかで、どのように自らの文化を再開発しているのかについて聞き取り調査を実施した。

現地調査の成果については、次にあげる本年度の研究成果において一部が反映されている。また、上記の通り、来年度以降に日本および中国にて書籍の出版を予定しており、それらを最終成果とする予定である。

○研究成果の公表

今年度の研究成果の公表は、大きくふたつに分けることができる。ひとつは「中国国境域／雲南班」が共通で取り組んできた課題についての研究成果であり、もうひとつはそこから派生する各班員個別の研究課題に対する取り組みである。

前者として、荻野はフランスで共著書『Des anthropologues au défi du global』（2015年10月、

Les éditions Châtelet-Voltaire) を発表した。その中で雲南省調査について中心的に取り上げ、新平県竹園村における 20 年間におよぶ通時的調査を通して、文化大革命を通じても消えることがなかった竹園村の文化が、グローバリゼーションによって一気に崩れざる過程を描き出し、人類学的知が現代社会でいかなる方向に向かうべきかについて論じた。

次に、西村は先端社会研究所全体研究会（2016 年 2 月 10 日、於：関西学院大学）において、「永遠の聶耳」と題する研究発表を行った。聶耳とは、雲南省昆明生まれの中華人民共和国国歌「義勇軍進行曲」の作曲者である。発表では、「義勇軍進行曲」とその作曲者である聶耳に対する中国各地での顕彰活動についてまとめられた後、2015 年 8 月の現地共同調査の成果として、聶耳の母親の出身地である新平県のタイ族村落においても、近年村おこしの一環として聶耳が顕彰されていることが示され、その意味について論じられた。

最後に、村島は日本台湾学会第 17 回学術大会（2015 年 5 月 23 日、於：東北大学）において、「台湾タイ族における文化継承と再創造－清境地区における実践を中心に－」というテーマで発表を行った。その中で、1960 年代に中国雲南省から台湾へと移り住んだ人びとからなる、台湾清境地区義民第二世代を事例に、観光開発を契機に掘り起こされた自らのルーツである中国少数民族文化を、義民第二世代自身が、清境地区というローカルな場において継承あるいは再創造していく実践について、主に火把節という祭典を通して明らかにしている。

これら西村と村島の研究成果は、2016 年度以降に出版される研究成果書籍『国家のはざまを生きる－中国雲南省少数民族から見る世界－』（荻野昌弘・李永祥編）に、それぞれ論文として収録される予定である。

一方の後者として、荻野は、論文「Catastrophe et temps」（『Communications』96 号、2015 年 5 月 7 日）において、また研究発表「ホモ・ベリクス（Homo Bellicus）－人間は戦争が好きなのか」（日本社会学会「2015 年日本社会学会シンポジウム『戦争をめぐる社会学の可能性』」、2015 年 9 月 22 日、於：早稲田大学）において、それぞれ「中国国境域／雲南班」による共同研究の成果について言及している。

さらに村島も、「台湾の新仏教の伝道－慈済会の災害復興と文化的再開発をめぐって」（天理台湾学会第 25 回記念研究大会：フォーラム「台湾の伝道宗教－歴史と現在、及びその展望」、2015 年 6 月 27 日、於：天理大学）と題する研究発表において、文化的再開発という概念を提示し、台湾の災害復興について論じる中で、雲南少数民族の文化的再開発についても言及している。また村島は、雲南大学出版社から刊行された学術雑誌『西南边疆民族研究』第 13 号にて、「宗教団体の灾后重建活动与其正当性－以中国台湾地区佛教慈善团体投入的两种灾后重建为例」と題する論文を発表している。

○定期研究会

共同研究「中国国境域／雲南班」第 4 回研究会（科学研究費・基盤研究（C）「中国雲南省の少数民族における文化変容に関する社会学的研究」との共催）

日 時：2015 年 1 月 23 日（土）15:00～17:00

場 所：先端社会研究所セミナールーム

講師：梶谷 懐 氏（神戸大学経済学部教授）

題目：「民意」のゆくえと政府のアカウンタビリティ

司会者：西村 正男（先端社会研究所研究員／社会学部教授）

梶谷懐氏による講演では、2014年に香港と台湾で相次いで起こった中華圏における二つの学生／市民運動の話題から、中華圏における「民意」とアカウンタビリティや、左派と右派のアジア的位相についての解説があり、中国において民意や民主が憲政とどのように関わってきたのかについて詳細な分析がなされた。またそこから、「反・近代」の動きが共時的に発生し、政府間の緊張が続く東アジアにおいて、リベラリズムを共通の価値観とする公共圏を創出することの可能性について展望が示された。

講演後の参加者を交えた議論では、宗族などの共同体の中国社会における位置、中国経済の産業構造とイノベーションに関する問題、中国新左派に対する評価などについての質疑応答があり、活発な議論が展開された。梶谷氏による、アカウンタビリティやリベラリズムをめぐる中国社会独自の動きについての議論は、欧米型の近代国家モデルとは異なる社会の姿を構想する「中国国境域／雲南班」の研究にとって非常に示唆的なものであったと考えられる。

◆「日本班」プロジェクト

代表：山 泰幸（関西学院大学人間福祉学部教授）

日本班は、最終年度にあたる2015年度も「排除」と「包摂」をキー概念として、日本社会におけるマイノリティとマジョリティの双方を射程にいれながら、研究を行った。具体的には、「在日」を主題とした研究を柱として、国際的な視野で研究プロジェクトを推し進めた。2015年6月19日には、済州大学校在日済州人センターとの学術交流協定締結の一周年を記念して、共同研究の成果を発表すべく第7回共同研究「日本班」研究会（2015年度第1回定期研究会）を開催した。そこでは、済州大学校から参加した李昌益教授が「在日済州人の親睦会」について、許南春教授が「在日済州人、境界人としての意味と役割」について報告を行った。また、日本班の山口覚教授（本学文学部）による「『宗教』の場で出会うコリアンと日本人－エスニック宗教文化の周辺－」を加えた3つの報告について、金明秀、島村恭則、難波功士の各氏（いずれも本学社会学部）がコメントを行った。その後は、山泰幸教授を司会に活発な議論がみられた。現在は、これらの登壇者をはじめとする日本班のメンバーによる共著『コリアンの移動と生活実践－排除と包摂のはざまを生きる』（仮題）の刊行にむけた準備を行っているところである。（文責：辛島）

先端企画セクション活動報告

先端社会研究所所長 盛山 和夫（関西学院大学社会学部教授）

1. はじめに

先端企画セクションは、2014年度から、先端社会研究所規程の第2条および3条に掲げられた本研究所の研究目的を踏まえつつ、「2016年度以降の先端社会研究所の研究プロジェクトの企画および本研究所の活動・組織の再検討」に関わるワーキング・グループとして設置された。より具体的には、以下の事項について、研究と検討を推進するものとされている。

- (1) 2016年度以降において先端社会研究所が遂行するのが適切と思われる研究プロジェクトおよび研究体制のありかた
- (2) 先端社会研究所における研究の発展を促進するための方策
- (3) 先端社会研究所の広報活動の強化

なお、これらの検討のために必要とみなしうる、研究会、セミナー、講演会、シンポジウム、ワークショップなどの開催についても企画、実施する、となっている。

本セクションの構成メンバー（2015年度）は次の通り。

盛山 和夫（先端社会研究所所長・関西学院大学社会学部教授）
佐藤 哲彦（先端社会研究所副所長・関西学院大学社会学部教授）
三浦耕吉郎（関西学院大学社会学部教授）
今井 信雄（関西学院大学社会学部教授）
榎本てる子（関西学院大学神学部准教授）
鈴木 謙介（関西学院大学社会学部准教授）

2. 2015年度の活動

(1) 先端研セミナー

先端研セミナーは、5回開催された。各回の内容は以下の通り。

第1回先端研セミナー

講師：野口 裕二氏（東京学芸大学教育学部教授）

タイトル：臨床社会学の現在——実践理論と社会の変化をめぐって

日時：2015年6月12日（金）15時30分～17時30分

会場：関西学院大学先端社会研究所セミナールーム

参加人数：40名

概要：

野口氏の講演内容は概ね以下の通り。臨床社会学の存在が多くの社会学者に知られるようになって15年がたった。臨床社会学にはさまざまな主題や方法があるが、今回は、臨床の現場でどのような理論やアプローチが注目されてきたかを追うことによって、そこで生じている変化の社会的意味を検討したい。2000年以降、臨床の領域では、Evidence-basedの考え方が主流となるなかで、Narrative-basedの考え方がわずかにそれに抵抗するという構図が見られた。しかし、近年注目されるOpen dialogueはこうした対立の構図を乗り越える試みとしてとらえることができる。また、この試みは単なる実践理論にとどまらずに、「技術化」と「個人化」が進む現代社会に対する批判理論としてとらえることもできる。社会の変化はどのような理論を生み、理論の変化はどのような社会の変化を映し出すのか。これらの問題を検討する。

・・・以上のような講演の後、フロアーからのナラティブ・アプローチの実践的な意義についての関心の高さがうかがわれる質問が多数提示され、熱心な質疑応答が交わされた。

第2回先端研セミナー

講師：Efrat Ben-Ze'ev氏（関西学院大学国際学部客員教授；The Ruppin Academic Center および Hebrew University）

タイトル：Imposed Silences and Self-censorship：The changing tale of war among 1948 Israeli veterans

日時：2015年7月1日（水）17時～18時30分

会場：関西学院大学先端社会研究所セミナールーム

参加人数：41名

概要：

Efrat Ben-Ze'ev氏の講演内容は概ね次の通り。The 1948 War was long presented among the general Israeli public as a miraculous victory against all odds. However, for the soldiers who were involved in killing and expulsion, the war experience was far more complicated and sad. This lecture explores the social mechanisms that operated on the veterans, silencing and censoring their tales. It also looks into the point in time when these silences began to dissolve, and tries to explain why.

・・・以上のような講演ののち、イスラエルの建国をめぐる集合的記憶の京成のされ方や、そこにおける政治権力の働きなどについて、活発な質疑応答が行われた。

第3回先端研セミナー

講師：鈴木 謙介氏（関西学院大学社会学部准教授）

ディスカッサント：山田 真裕氏（関西学院大学法学部教授）

高原 基彰氏（関西学院大学社会学部准教授）

柴田 悠氏（立命館大学産業社会学部准教授）

富永 京子 氏 (立命館大学産業社会学部准教授)

タイトル：食とグローバル化の社会学——ポスト“マクドナルド化”時代のフードスケープ

日時：2015年7月18日(土)17時15分～19時

場所：関西学院大学大阪梅田キャンパス1407教室

参加人数：21名

概要：

鈴木氏の講演内容は概ね次のようであった。現代の「食」を巡っては、農学はむろんのこと、流通の近代化を背景に、経済学・政治学・心理学・経営学など多岐にわたる分野で研究が進められている。だが特に近年では「食とグローバル化」の関係をめぐる研究が盛んになりつつある。社会学においても農村社会学や環境社会学など、生産者・産地を主たる軸として研究蓄積が存在するものの、グローバル化した世界における食の問題を扱ったものとしては、リッツァの「マクドナルド化」以来、包括的な枠組みに当たるものが提起されていない。マクドナルド化そのものについての議論もあるが、そもそも21世紀以降、グローバルな「食」を巡る問題はより複雑化しており、新たなパースペクティブが求められていることは明らかである。今回は、「食とグローバル化」についての研究動向を概括し、ディスカッサントとともに議論を深めていく。

・・・以上のような講演ののち、食とグローバル化をめぐる広範な問題関心や問題状況について、フロアーと講演者とのあいだで活発な討論が展開された。

第4回先端研セミナー

講師：盛山 和夫 氏 (関西学院大学社会学部教授)

タイトル：なぜ公共社会学か——数理社会学の夢と挫折を越えて

日時：2016年3月7日(月)15時～17時

会場：関西学院大学先端社会研究所セミナールーム

参加人数：60名

概要：

盛山氏の講演内容は概ね以下の通り。今日、誰がデカルトやカントを読むだろうか。人文知の危機が指摘されるようになって久しいが、社会学もそれと無縁ではないように思われる。1968年は第一の近代と第二の近代とをわかつ分水嶺であるが、第二の近代は「再帰的(=内省的)近代」として特徴づけられる。西欧知の自文化中心主義を乗り越えようとする試みにおいてレヴィ=ストロースの先駆的な役割は大きく、報告者にとって数理社会学とは、構造人類学と同様に真に普遍的な知を探求するための道であった。しかし1971年に *Journal of Mathematical Sociology* 誌が発刊されてから45年になるが、誇るべき成果は少ない。おそらく、社会学が引き受けている課題に取り組む上で、数理という道具の普遍性だけに依拠するのでは足りないということだろう。社会が「意味」からなっていることからすれば、社会学の中心テーマは、多様性を前提にしながら、意味の共同性と亀裂をめぐる諸相を解明することになる。ここでは、人文知との批判的対話も欠かせない。この方向では、社会関係資本論や市民社会論の

試みもあるとはいえ、探求を明確化する上で公共社会学という概念がふさわしいだろう。

・・・以上のような講演のあと、意味の共同性はどのようにして可能かや、社会学における学説研究の役割、あるいは数理社会学と公共社会学との関係性などをめぐって活発な質疑応答がなされた。

第5回先端研セミナー

講師：Kees Ribbens 氏 (NIOD 上級研究員)、Ralf Futselaar 氏 (NIOD 研究員)

タイトル：Mass Violence and Historical Culture

日時：2016年3月14日(月)14時～17時

会場：関西学院大学先端社会研究所セミナールーム

内容：

Introduction “The Niod in Duch historical culture”

Dr. Kees Ribbens, Dr. Ralf Futselaar

・ Report

“What Wikipedia can tell us about contemporary public interest in the Second World War? A transnational comparison of using historical entries in a global on-line encyclopedia”

——Dr. Kees Ribbens

“Mapping emotions in public discourse about war and violence”

——Dr. Ralf Futselaar

概要：

先端社会研究所では、これまで「戦争が生み出す社会」を一つのテーマとし、オランダの戦争資料研究所 (NIOD: Institute for War, Holocaust and Genocide Studies) と共同研究を行ってきた。今回はオランダから二人の研究者を招き、セミナーを開催した。戦争と暴力、その記憶、表象、言説をテーマにした、オランダ戦争資料研究所での研究プロジェクトを紹介していただいた。

(2) シンポジウム

シンポジウムは、1回実施した。

タイトル：薬害と現代社会をめぐって——薬害の被害経験から考える

日時：2016年3月1日(火)13時30分～17時

会場：関西学院大学上ヶ原キャンパス 図書館ホール

参加人数：50名

趣旨：

現代社会では健康をめぐる多くの問題解決が医薬品によって行われているが、その一方で1960年代のサリドマイドによる被害、1970年代のキノホルムによる被害、1980年代から90年代にかけての薬害エイズ、さらに近年では抗がん剤イレッサによる副作用被害など、「医薬

品による健康被害」である薬害もまた、やむことなく続いている。果たして薬害が指し示す現代社会の問題とは何か。これまでの薬害経験から私たちは何を学び、何を次世代に伝えていく必要があるのか。本シンポジウムは、薬害被害当事者の経験の語りと、薬害研究者の報告をもとに、現代社会における薬害の意味と、それが示唆する現代日本社会の問題点を考察する。

報告者

『薬害から学ぶ』増山ゆかり氏（公益財団法人いしずえ 常務理事）

『薬害被害者になるということ』花井 十伍氏（全国薬害被害者団体連絡協議会 代表世話人）

『〈薬害〉経験の理解のために』本郷 正武氏（和歌山県立医科大学医学部 准教授）

コメンテーター

種田 博之氏（産業医科大学医学部 講師）

司会

佐藤 哲彦氏（関西学院大学先端社会研究所 副所長）

討論：3つの報告の後、コメンテーターからのコメントがあり、フロアーを交えて極めて熱心に討論が行われ、やや予定時間を超過して終了した。

(3) 第1回先端研ワークショップ

タイトル：ダイアログ——ケアする者とされる者との関係性について考える

日時：2015年4月22日（水）15時30分～17時30分

場所：関西学院大学社会学部共同学習室

シニアスカラー：前田 拓也氏（神戸学院大学現代社会学部准教授）

ジュニアスカラー：矢崎 千華氏（関西学院大学大学院社会学研究科大学院研究員）

飯塚 諒氏（関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程）

司会：白波瀬達也氏（関西学院大学社会学部准教授）

参加人数：20名

概要：

本企画「ダイアログ」は、関西圏の若手研究者や関西学院大学出身の研究者を「シニアスカラー」として招き、後輩となる「ジュニアスカラー」の大学院生や、学部生との対話の中で、「社会の中で研究者はどうあるべきか」「学問の中で自分の研究はどうあるべきか」、そして「社会の中で自分は何をすべきか」ということを考えるものとして企画した。その意味で、先輩と後輩の「ダイアログ」であるだけでなく、社会と学問の「ダイアログ」であり、またさらに、今の自分と将来の自分の「ダイアログ」でもある。

今回は、関西学院大学を卒業し、現在、神戸学院大学准教授の前田拓也氏を招いた。前田氏は、関西学院大学在学時から介助の現場で活動し、2009年に出版された『介助現場の社会学——身体障害者の自立生活と介助者のリアリティ』（生活書院）により、第1回福祉社会学会奨励賞を受賞された気鋭の研究者である。長年の経験を踏まえて取り組まれてきた研究について、前田氏と、後輩となる大学院生や学部生とが対話することで、「社会とは」「研究とは」「自分とは」という問いに向き合う機会となるワークショップとして企画した。

・・・当日は、前田氏により、大学教員となり、介助の現場から大学教員に軸足をシフトさせてからの調査研究の取り組みについて報告があった後、矢崎氏からは、介助の現場で感じる個人的感情をどう研究に反映させるのか等、飯塚氏からは、調査対象者と研究者の距離の取り方等について問題提起がされ、フロアーを交えて活発な議論が交わされた。